

アジアのデザイン文化の比較研究

山車の造形と祭礼文化を中心にして(3)

COMPARATIVE STUDY OF DESIGN CULTURE IN ASIA Focusing On The Forms Of Mountain Floats And Festival Cultures (3)

今村 文彦	基礎教育センター 教授
杉浦 康平	アジアデザイン研究所 所長
齊木 崇人	デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
松本 美保子	名誉教授
山之内 誠	デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授
黄 國賓	デザイン学部ビジュアルデザイン学科 准教授
さくま はな	先端芸術学部クラフト・美術学科 助教
尹 聖喆	大学院芸術工学研究科 助手
曾和 英子	デザイン学部プロダクトデザイン学科 非常勤講師

Fumihiko IMAMURA	Center for Liberal Arts, Professor
Kohei SUGIURA	Research Institute of Asian Design, Director
Takahito SAIKI	Department of Environmental Design, School of Design, Professor
Mihoko MATSUMOTO	Professor Emeritus
Makoto YAMANOUCI	Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
Kuo-pin HUANG	Department of Visual Design, School of Design, Associate Professor
Hana SAKUMA	Department of Craft & Arts, Progressive Arts, Assistant Professor
Seongcheol YUN	Graduate School of Arts and Design, Assistant
Eiko SOWA	Department of Product Design, School of Design, Adjunct Lecturer

要旨

本報告は、アジアデザイン研究所の活動としてアジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。研究所では開設以来、アジア各地域でみられる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、継続的に取り組んできた。

2013年度は第2回国際シンポジウムを開催した。アジア各地に分布する舟形の山車とそこにみられる蛇や鳥のモチーフやデザインの象徴性、神話性をめぐって、ミャンマー、タイ、日本からの報告を中心に活発で意欲的な議論を重ね、アジアの山車の構成原理についての興味深い知見を得ることができた。

さらに山車イメージと密接に関連する山や木の造形を巧みに表現しているインドネシアの影絵ワヤン・クリに用いられるグヌンガンについて、現地で調査を実施し、その造形的特徴、使用法や構成原理等が明らかになった。また日本で活躍するバリ島の人形遣い(ダラン)を招き、バリ島のワヤン・クリについての研究会および上演会を開催した。

これらの一連の活動により、アジアの山車と山、木などとの関連性について把握し、アジアのデザイン語法を解明する手がかりを得ることができた。

Summary

This report deals with the main research theme of Research Institute of Asian Design (RIAD), focusing on the cultures of mountain floats in Asia from design-centered approach. We want to make clear design technique (language) of mountain floats from their wide variety of forms, symbolic meanings, cosmology and their relationships of society and natural environments.

We held this year 2nd international symposium on boat-shaped mountain floats and motifs of sacred bird and dragon (or snake). Researchers from Myanmar, Thailand and Japan made visual presentations about the symbolic meanings and structures of characteristic mountain floats of their each country.

We had also investigation of symbolic meanings and structural principles of *Gunungan* used in Indonesian shadow puppet theater, shaped just like a mountain and depicted Naga, sacred creatures and wide variety of tree of life in Jogjakarta, Indonesia.

RIAD got very useful insights from these activities and research for deep understanding about design cultures of Asia.

1. 研究目的

本研究は、アジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。アジア各地域の祭礼でみられる多種多様な山車の造形的特徴、象徴性、それらの背景となる世界観や祭礼の仕組み、社会や環境との関係性などについて、現地調査、比較研究を通じて総合的に検討し、その全体像、デザイン手法（語法）を明らかにすることを目的としている。これらの一連の調査研究を通して、さまざまな山車の形態、造形、地域的固有性の背後にある基底的共通性に着目し、アジアのデザインにおける文化的特徴、独自性を追求し、把握することを目指している。

本研究は 2011 年度からアジアの山車文化に焦点をあてて継続的かつ集中的に実施してきたが、2013 年度は舟形の山車の造形性、象徴性に焦点をあてた第 2 回国際シンポジウム「送る舟・飾る船—鳥と龍が支えるアジアの舟山車—」を開催した。さらに山車の造形と深く関わる山の象徴性を探るために、インドネシアにおいて影絵ワヤン・クリに用いられる「グヌンガン（クカヨン）」の役割やその構成原理を現地で調査した。その後、日本で活躍するバリ島のワヤン・クリ研究者でダラン（人形遣い）としても活躍されている梅田英春氏（静岡文化芸術大学）を招いて、研究会および影絵人形芝居の公演を開催した。以下にその概要を記す。

2. 第 2 回国際シンポジウム「送る舟・飾る船—鳥と龍が支えるアジアの舟山車—」の開催（2013 年 5 月 25 日）

シンポジウムの冒頭では、イランの生命樹の山車ナクル（モジュガン・ジャハンアラ）、バリ島の葬儀山車バデ（ナンシー・タケヤマ）の映像を上映した。

その後の発表では、ミャンマー出身のゼイヤー・ウィン氏（神戸芸術工科大学 RIAD 特別研究員 / JICA 研究員）が、〈鳥を象る仏像巡行の舟山車「カラウエイ船」〉と題して、ミャンマー中部インレー湖のパウンドロー祭礼について報告した。湖の中にあるパゴダ（寺院）に祀られている仏像が乗せられる、伝説の鳥カラ

ウエイを模した黄金船「カラウエイ船」の造形的特質と神話的意味について、現地取材をもと



写真1 シンポジウム発表風景

タイからは〈龍を飾る仏像巡行の舟山車「ルア・プラ・ナム」〉のタイトル



写真2 活発なディスカッション

で、スリヤー・

ラタナクン（マヒドン大学 / 原稿のみ読み上げ）、ホーム・プロムオン（マヒドン大学）の両氏がタイ南部のチャク・プラ祭に曳きだされる舟山車について報告した。雨季の雨安居明けにおこなわれるこの祭礼では、仏像を載せた舟山車の装飾にナーガ（龍）のモチーフが多用される。報告では、仏教説話と深い関連があるナーガの神話性、象徴性について言及した。さらに、2012 年度に実施した現地調査の報告映像（黄國賓）も上映された。

タイではナーガやさまざまな鳥のイメージ、モチーフが建築や装飾などで多く見られるが、ソーン・シマトラン氏（シラパコーン大学）は〈タイの伝統文化にみる「鳥」と「蛇」のシンボリズム〉において、ガルーダやハムサ（白鳥）、ナーガなどの象徴的役割や意味について豊富な事例を元に解説した。

三田村佳子氏（日本民俗学会）は〈意匠としての「舟—日本の舟山車」〉と題した発表において、日本の多様な舟山車の系譜的特徴を整理するとともに、長野県諏訪に集中的に分布するオフネという舟山車について報告した。とくにその形態的分類、歴史的な変遷や伝播の過程、背景となる信仰や出自伝承とともに、信濃への移入経路にも言及した。

これらの一連の報告を受け、ゲストとして参加した神野善治氏（武蔵野美術大学）が民俗学的な見地から船の祭りの原型、風流（ふりゅう）としての祇園祭の鉾の先端に祀られる小船に祭りの原初形態が残存していることなどを指摘した。

その後のディスカッションでは、杉浦康平アジアデザイン研究所長から、カラウェイ船、ナーガの舟山車に関連して、平安時代に日本に伝来した「龍頭鷗首」舟について紹介があった。鷗（げき）は風に向かって大空を力強く飛ぶ鳥で、鷗首を舳先につけると沈没しないとされ、龍頭舟と左右一対で池上に浮かべて、極楽浄土を願ったという。その後も活発な議論のなかで舟形の山車のアジアにおける広がり、鳥や蛇をモチーフとする造形性の意味について十分な理解を得ることができ、盛況裡にシンポジウムを終えた。（写真 1、2）

3. グヌンガンのインドネシア現地調査

グヌンガンとは、インドネシアの影絵ワヤン・クリに用いられるもので、「グヌン（山）のようなもの」を意味するおり、山を象徴しているとされる。また、「クカヨン」とも呼ばれ、「樹木（カヨン）」に由来する。山であり、樹木であるグヌンガンは、影絵のなかで最初と最後には必ず幕の中心にたてられ、演じられる劇が神聖なものであることを示すほか、劇中の重要な場面転換の際にも用いられる。他の人形と同じく水牛の皮で作られるグヌンガンは、先端が尖った山形の形状をもち、表面に樹木や池のある建物、ナーガをはじめとする聖獣などが刻まれ、裏面には神の顔と抽象的な文様が描かれる。アジア全域で見られる生命樹や宇宙樹のイメージや象徴性とも重なり、動く山である山車の造形性とも関連する（写真 3）。

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日本、中国における聖山を象るカミ迎えの祭礼装置にみるアジアデザインの構造比較」の海外調査の一環として、2013年8月26日から9月1日にかけて、インドネシアのジョグジャカルタにおいて、ダラン（人形遣い）として活躍し、国立芸術大学で後進の指導に長年あたった

バンバン（H. Bambang Murtiyoso）氏への聞き取りをおこない、日本ではあまり知られていないグヌンガンの造形原理やモチーフの意味などについて調査した。

現存する最も古いグヌンガンは、中央に一本の巨大な樹が佇立し、その下をナーガが支えている（写真 4）。現在のものに比べると単純な構成になっている。比較的古い「グヌンガン」の多くは、「山」のイメージより「樹」のイメージのほうが強い。神の代理として人形を操り、呪的な力をもつとされるダランは「グヌンガン」という呼び方よりも「クカヨン」と呼ぶことが多いが、ワヤン・クリという影絵の起源とのなんらかの関連性を想定でき、示唆的である。

グヌンガンの特徴づける構造的な特性として重要なものは、表象イメージ、モノそのものや神話性などさまざまなレベルで見られる対照性である。グヌンガンの裏面に口を開け舌を出した火の神（あるいは火のエネルギー）が描かれた男性原理を表すものと、口を閉じた水の神（あるいは水のエネルギー）で女性原理を表すものがあり、女性の方がやや幅が広い。バンバン氏の説明によると、懐胎した女性と関連しているという。また、人形は位の高い神は必ず幕の右から、戦いの場面では悪役は左から登場し、右の善神が勝利するほか、幕の両端に神々の人形が配置されるが、必ずしも配置が決まっているわけではない。

影絵は、光と影、明と暗から構成される。人形自体はていねいに彩色され、精巧に作られているが、観客から見ると、影しか見えない。従来、この点に関して



写真3 グヌンガン



写真4 現存最古のもの



写真5 ワヤン・クリ



写真6 人形を操るダラン

側から見るスタイルがジャワでは一般的になっている（写真5、6）。

グヌンガンを構成しているさまざまな対照性は、造形原理として二項対立とその止揚というアジアに広くみられるデザイン語法のひとつといえる。その意味で今回の調査で、アジアの山車もその例外ではないことが確認された。

4. ワヤン・クリ研究会と公演

インドネシアでのワヤン・クリ調査を踏まえて、バリ島のワヤン・クリの唯一の日本人ダランであり、日本語で上演する活動を続けている梅田英春氏（静岡文化芸術大学）を招いて、研究会（2013年11月11日）とワヤン・クリの上演会（2014年2月1日）を開催した。

バリ島のワヤン・クリの研究者でもある梅田氏は、ワヤン（wayang）が影（bayang）に由来するといわれているが、絵巻物のようなワヤン・ベベールが存在することから初期形態が影絵であった確証はないという。また、ジャワでグヌンガンに相当するものは、バリ島ではカヨナン（kayonan）といい、植物の葉に近い楕円形をしている（写真7）。表面には生命樹をはじめとして渦巻く紋様が満ち満ちている。樹木を意味する「カ

ジャワの神秘主義との結びつきが指摘されることが多かったが、バンバン氏はこの点についてはあまり強調しなかった。1950年代にスカルノが彩色している人形を見ることを始めてから、現在ではダラン

ヨン（kayon）、思考を意味する「カユン（kayun）」と関連しているという。バリ島でもっとも神聖なワヤンの上演は、寺院祭礼の際に一番奥で幕を使わずに、神に向かって（観客がいない状態で）おこなわれるもので、呪術的な性格をもつ。また、ダラン自身も呪術師、祭司



写真7 バリ島のカヨナン

として浄化儀礼を担うなどの役割をもつ。演劇的なジャワのワヤン・クリとの相違点でもある。

バリ島のカヨナンは、先端が尖り山形をしたグヌンガンとは異なっていて「山」のイメージを想像しにくい、やはり「山」としての機能をもつ。

後日開催したワヤン・クリの上演会では、「スタソーマ物語ー不殺生の教え」という仏教譚が演じられ、学外からの参加者を含めた多くの観客を魅了した。

5. 研究会の開催

これらの活動とは別に、アジアのデザインの多様性を学部学生に啓蒙する教育活動として、台湾を代表するグラフィックデザイナーであり、中国文化の研究者でもある黄永松氏を招へいし、2013年11月26、27日に〈「中国的デザイン」とは何か〉、〈福建「土楼」その魅力〉の2回の講演会をビジュアルデザイン学科および環境・建築デザイン学科において開催した。

6. まとめ

2013年度のさまざまな活動を通じて、アジアの山車を構成する基本原理の把握、デザイン語法の追究のための大きな手がかりとなり、豊富な資料収集ができたといえる。これらを踏まえ、次年度以降は海外および国内での調査を始めとして、研究成果を整理、体系化し、本研究の全体的なまとめを検討していく。